

歯学生の今

歯学科2年 酒井 佑 樹

「入学者のことば」昨年このタイトルで歯学部ニュースに原稿を載せて頂いてから、早いものでもう1年が経ち、今、私は新たに2年生として、昨年とはまた違った気持ちで原稿を書かせて頂いています。

2年生になり、日々の学校生活を送っていく中で、大きく変わったな、と感じる事があります。それは「キャンパスが五十嵐から旭町に移動になった事」、そして「授業内容がより専門性を増してきた事」です。

1年次までは教養科目がメインであったため五十嵐キャンパスでの生活でしたが、2年生に上がると同時にキャンパスが移動となり、旭町での生活が始まりました。医歯学総合病院に隣接するこのキャンパスでは、多くの患者さんが病院を訪れ、緊急時にはドクターヘリが飛び、様々な医療関係者が行き交う光景が毎日見られます。「病院」という雰囲気を直接肌で感じる度、すぐ将来、目の前にある、この立派な病院の医療という現場に自分も立つのだ、と、強く意識させられます。また、ひとたび歯学部棟内に足を踏み入れるとたくさんの先輩方が、緑衣やユニフォームを着て現場に向かわれていたり、大きな器具をもって実習に臨んでいたりする姿が見られ、勉強へと向かう意識をより強くさせられます。

授業内容も大きく変わりました。人体解剖学や、発生学、歯科理工学など将来に繋がる内容がググッと増え、覚えることも多くなり1年次に比べ苦勞も感じていますが、専門性の増した内容に興味をそそられるとともに面白みも感じています。また、2年生になってからも早期臨床実習があり、1年生の時とは異なり、実際に人工歯を削らせて頂いたり、CTやレントゲン写真から病名

を説明して頂いたり、矯正治療で用いるワイヤーを曲げさせて頂いたりしました。どの工程も自分が歯科医になるのだというビジョンを深めることができ、これから学ばなければいけないことの多さに身の引き締まる思いがしました。

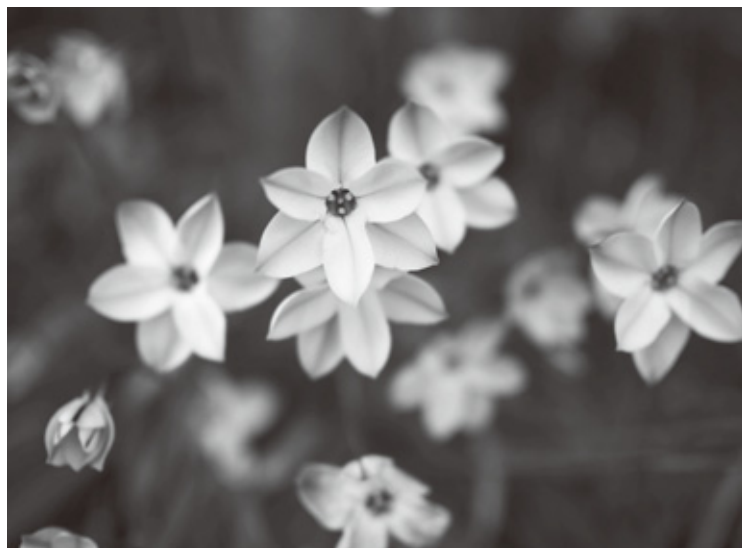
早期臨床実習では実際に治療を見学させていただくのですが、その中で私は、元気のいい初老の女性の患者さんに出会いました。その方は、「先生。私はどの方法がいいのかよく分からないから、私が先生の母親だったら先生はどうするか。それで選んだ選択肢を教えてくださいませんか？」と仰っていました。その言葉を聞いて私は、様々な事を考えさせられました。まず一番に考えたのは、患者さんは誰もがまず、治療に関して不安や悩みを抱えていて、お医者さんにそれをわかってもらい身近な存在のように寄り添って欲しいので



はないか。という事です。「自分を母親のように診て欲しい。」という、その発想は今の自分には全くなく、はっとさせられました。そして、母親のようにみる事で、今持っている視点とは別の視点をも、持てるのではないかと、思わされました。また、患者さんに行おうとしている治療はどのようなもので、どのような材料を使うのかということを知りやすく伝えることの重要性も考えさせられました。患者さんに分かりやすく説明するためには、まず、自分が一番内容を理解していなければならない。そのためにはやはり今、勉強を頑張る必要がある。自分の頑張りが患者さんの治療に影響するのだ。と、思った瞬間、自分の為、に行っていた「勉強」というものが不思議な広がりを見せ、まだ見ぬ誰かの為に学ばなければならないんだ。という強い意欲が湧きました。

勉強以外でも、部活動では男女ともに尊敬する

先輩方に囲まれて練習ができたりと、充実した日々を送らせて頂いています。2年生のこのメンバーと出会い、もう1年と半年が経とうとしています。浜辺でBBQをしたり、クリスマス会をしたりして、出会った頃より、遥かに仲の良さは増しています。2年になっても昼休みにはバカ騒ぎしたり、コンビニの店員さんが可愛い！とテンションが上がったり…。そんな中でも、みんなで勉強し合ったり、分からないことを質問し合ったりと、和気藹々とした雰囲気の中にも歯学部生としての自覚が皆強く芽生えてきたように感じます。この仲間たちとなら最後まで、大学でしかできない貴重な時間を過ごしていけると強く思っています。こんな、愉快でも実は、しっかりしている仲間たちと共に、精一杯、少しずつでも、自分たちの将来に向けて、歩んでいきたいと思えます。



歯学生の今

歯学科3年 内田 俊

医療人にとって、無知は罪である。医師・歯科医師が行う「治療」の目的はひとつ、その病気・疾患を治すことである。しかしそのアプローチは多種多様だ。自らの知識・経験を総動員して治療に色付けをし、謎に立ち向かう。そこに「知らない」はない。おおよそ20歳の青二才な私たちでも、いずれプロとしての誇りと優れた能力を持ち、歯の生涯に、人の生涯に希望を灯すことであろう。そうでなければならない。そんな私たちの根幹は学習によって成り立つ。そこで私たちが日々尽力している「人体解剖学実習」について書かないわけにはいかないだろう。

解剖室に入る前に一礼をし、全身一式の身なりを整え、御遺体を前にして黙とうをする。線香のにおいと独特の雰囲気立ち込めた中、このようにして実習は始まる。私たちは御遺体を前にして、その生前の尊い精神に対して謙遜の意をもたざるを得ない。日々の実習のたびに、ここから何かを吸収しなければならないという使命感・義務感が自らを駆け巡り、ゾクゾクとした鳥肌を形を変え全身を奮い立たせる。実習では体のどこに何が通っているのか、どこに何があるのか、自分たちでメスやピンセットを用いて全身をくまなく解剖し、その三次元的な走行・位置を把握していく。だがご想像の通り教科書通りにはいかない。「これは何の動脈だろう。しっかり把握しないと。」「上行咽頭動脈が顔面動脈から分岐しているね。」大学一年生の時にカエルの解剖実習で鼻水が垂れるほど号泣していた仲間も鋭い眼差しでそうつぶやく。ふと周りを見渡せば、仲間の顔つきはかつてより少しばかり大人になり、ダボダボだった白衣もなんら違和感のない立派な装いへと姿を変えていた。

私が解剖学実習を通して一番印象に残っているのは口底部の解剖である。そもそも「口底部」と

いう言葉を耳にしたことがあるだろうか。口底部とは舌の裏面におおわれた下顎の内側の部分のことである。一般の方はともかく歯科医師でも目ごろは目にしない（目には見えない）領域である。そこには口腔内の様々な組織と関わりを持つ重要な動脈や神経、腺などが存在している。臨床、特に歯科インプラント治療ではCTなどでその走行や位置を把握しているのだが、将来そのインプラント治療をやりたいと考えている私にとって、様々な角度から生でその全景を観察できたことは正直この上なく意義あるものであった。この半年間に渡る実習の中では計4回の口頭試問が課される。口頭試問とは文字通り口頭でいくつか質問をされ、目の前の御遺体を用いてそれに答える試験だ。これはそれまでにやった一通りの知識を整理する良い機会である。しかしその前日や直前は緊張で食事や喉を通らなくなったり、何回もトイレにいったり、また徹夜2連続目などの次元の違う人が出てきてしまったりするなど、それほど身を引き裂かれる思いをする。これから先「逃げ出したい」と思うことがあった時、このことは必ず脳裏によみがえり、逃げそうになっている自分の心を初心に戻してくれるであろう。この解剖学実習で学んだことに無駄はひとつもなくそのすべてを



十分に理解することが、御遺体やそのご遺族、また一回の実習で7、8時間にも渡って私たちの実習に付き合ってくださった先生方への一番の感謝であると私は実感した。

私たちが今後臨床的な学習をしていく中で、ひとりひとりが自らにしか出せない価値を創造することはとても大切だ。「枯れ木も山の賑わい」で

はなく、歯科医療という山で独特の色を放つ大きな大木とならなければならない。志高く日々研鑽に励み、これからの生活の中で自分にはどんな能力・工夫が必要なのかを考え、「いい医者になりたい」という思いが確固たるものとなるよう学生生活をより充実したものにしていきたい。いまこの時を大切にしてください。



4年生の今

歯学科4年 野村 加奈実

校舎改修工事の真っ只中に入学した私達も4年生となり、校舎や医歯学総合病院の雰囲気はすっかり様変わりした。先輩方に「君たちの学年はピカピカの実習室を使えるんだろうね～いいねえ～」と言われていたあの時が懐かしく感じる。それとは引き換え、チャホヤされていたのも遠い記憶……今や部活では幹部学年。お局、怖い人、おばさんなどと呼ばれるようになった。自分の立場も気づかぬうちに様変わっていたようである。

4年生のカリキュラムも今までとは一変した。座学が多かった毎日も、実習中心となり、白衣を着て歩く機会も格段に増えた。最初はたくさんの歯科材料が入ったあのお道具箱をウキウキしながら転がしていたのだが、そんな余裕もなくなっている。(エレベーター、廊下等々でご迷惑をおかけして申し訳ございません。)やる度にてんやわんやで、きれいな実習室も一瞬で粉まみれ。全部床義歯の実習のあとは小野教授に「祭りの後の土手ようだ……」と言われていたほどである。自分の不器用さと格闘しながら、毎回与えられるノルマをクリアするのに精一杯の日々である。一方で、座学で勉強したぼんやりとしていたイメージも、自分で手を動かすことによって一本の糸のようにつながったり、歯科医師である父が実家で使っていたユニファストのにおいをかいで、これだったのか！とふと懐かしく感じたりもした。また、実習を通して、自分が作業している時でも優しく丁寧に教えてくれるクラスメイトをみて、たとえ自分が忙しくとも、困っている患者さんへの優しさを忘れず対応できる医療従事者になりたいと決意した。

そして、4年生になってホットなワードとなったのは「これ！国試にでるよ！CBTででるよ！」その度に胸が騒いでしまうのは、私だけじゃないだろう。去年より格段に増えた国家試験の話題は

合格率の低下だけでなく、世間のニーズに対する歯科医師のあり方さえも考えさせられる。いったい自分はどんな歯科医師になりたいのか。興味や適性を考慮しながら決めていかなければならないのだが、いろいろな話を聞くだけで決められずに焦るばかりであった。そんな話を何人かの先輩や先生に持ちかけると、自分の時もそうだったと口々におっしゃる。私自身もこの時期を一種のモラトリアムと捉え、いろいろな学びとの出会いや自分の成長を通して、ゆっくりと自分のやりたいことを見つけていこうと思うようになった。目の先の試験ばかりに目が行き、視野も狭くなりがちだが、大切なのは将来のビジョンを描いていくことだと思う。(と言って勉強することから言い逃れるつもりはない……以下略)

唯一変わらないものといえば、教室の中である。クラスのメンバーはもはや家族のようだ。各々がそれぞれ変わらぬアイデンティティーを獲得している。このクラスに収まっているということは自分にとっては偶然であり、運命でもある。これからも苦楽を共にしていくであろうクラスの仲間を大切にしていきたいと思う。これからもよろしくね！



5年生の今

歯学科5年 横 関 麻 里

歯学部ニュースとご縁があるようで、2回連続で原稿を書かせていただきます、歯学科5年の横関麻里です。

最近何かと集合写真をたくさん撮っている5年生。ですので、今回は、集合写真に沿って「5年生の今」についてお話していきます。

① 岩室温泉旅行

4月初旬、今年度もみんなで頑張っていこうと、47期の有志で岩室温泉へ一泊の温泉旅行に行ってきました。みんなで温泉に浸かり疲れを十分に取り、大広間を貸し切ったの美味しいお酒と料理。それは最高でした。ビンゴ大会などもあり(ちなみに最初のビンゴは私でした)、夜遅くまで大いに盛り上がりました。47期の結束をより固める良い機会となりました。



② ポリクリ・総合模型実習

5月になると私たちは緑衣デビューをしました。5年生になりポリクリ(臨床予備実習)が始まりましたが、10月から始まる臨床実習を意識する実習ですので、常に身が引き締まる思いでポリクリに臨んでいます。ポリクリは少人数のグループで各科を回りますが、その度に多くの先生方が手厚く指導してくださり、とても学ぶことが多い毎日です。

また相互実習で、初めて人の口の中、体に触れ、近い将来医療従事者になるのだと実感すると共に、自然と責任感もわいてきました。

また、5年生のカリキュラムには、総合模型実習という、歯科疾患を抱えた患者さんの治療計画を自分で立て、実際に模型上で治療を進めていく実習もあります。患者さんの主訴や口腔状態、全



身状態を考えて治療の順序を考えるというのはとても難しいことだと感じました。実習を進めていくと、自分で立てた治療順序では上手くいかない状態になってしまうこともあります。私は、抜歯により咬合関係が不安定になってしまい、適切な補綴物を作ることが難しい状態に出くわしました。あらかじめ内容が決まっている実習とは違い、実際にやってみて初めてわかることがありとても勉強になる実習だなと感じています。

③ 運動会

5年生は運動会の幹部学年でしたので、運動会に参加するだけでなく運営にも携わりました。実行委員長の森くんを初め、クラスみんなが運動会を盛り上げようと一生懸命準備をしている姿を教室でみかけました。少し大げさですが、高校の文化祭前の盛り上がりを思い出し青春を感じました。

運動会当日は天候に恵まれ、多くの先生方にもご参加いただき、とても楽しい運動会となりました。5年生は最初の種目である玉入れで1位を獲得し、その良い流れに乗り、優勝することができました。とても良い思い出です。

④ 部活

5年生になってもなお部活を現役で頑張っている人がたくさんいます。ちなみに私はスキー部で、3月に新潟の妙高で開催されたデンタル（歯学部総体）に出場してきました。多くの部活は夏にデンタルがあります。5年生はCBTもありとても忙しい夏になるとと思いますが、デンタルに出場するみんなには頑張ってもらいたいです。

以上が「5年生の今」です。これから5年生を病院でみかけることが多くなると思います。先生方をはじめ、病院スタッフや事務の方々、先輩方、後輩のみんな。5年生をよろしく願っています。



筆者 中央奥



6 回目の春に思うこと

歯学科6年 目黒史也

新潟の短い春が来て、初々しい新入生の顔を見かけるようになった頃、ようやく学部最高学年になったのだという実感が腑に落ちた。どこか地に足のついていないような昂揚感に包まれたあの春から、もう5年とも、まだ5年とも感じられる。

入学当初、歯科医療に関して一般人と変わりのない知識しか持ち合わせていなかった頃からここまでの変化は、おそらく私の人生において後にも先にも最大の変化であろう。紆余曲折を経て、最高学年として、大学病院の看板を背負いながら臨床実習に励む今、歯科医師を目指すうえでこの学校を選んでよかった、と日々心から思う。

有体に言って、新潟大学歯学部の毎日は楽ではない。

1年間の一般教養を終え、本格的に2年生になってからは、殆どノンストップで講義や実習に追われることになる。2年生以降の講義は、どの科目も易しくはないし、実習は講義時間を過ぎてしまうことも多い。担当される先生方は、熱心で、どんな時も妥協が許される環境ではない。中にはあまりの忙しさに、心が折れてしまいそうになる人もいるし、何を隠そう、私自身がそうであった。そんな中担当して下さる先生方の叱咤激励と、友人たちからの励ましのお陰で、歯を食いしばりながら何とか前に進んでこられた。

そして、そんな忙しい毎日の中でも、私たちは単に歯科を究めるためだけに、大学へ毎日通うのではない。

毎年開催される歯学部運動会、学年対抗各種球技大会、医歯学祭に始まり、各部活動ごとで年に一回開催される全日本歯科学学生総合体育大会への参加、あるいは大学独自のSSSVプログラムと称される短期留学プログラムへの参加、来学した留学生との交流、SCRPと呼ばれる研究プログラムへの参加をすることもできる。それぞれにおいて、新しい出会いがあり、学びがあり、忙しい毎日の中にも色彩が生まれていく。

5年生の秋になれば、共用試験を突破し、晴れて1年間の臨床実習に参加することになる。これほど内容の濃い臨床実習を行っている歯科大学は他にないだろうと思えるほどに、毎日が発見と猛省と勉強に溢れる、理想の実習環境である。

猛スピードで過ぎていく時間において行かれないよう、全速力で走り抜け、気づけば6回目の春を迎えている今、この学校を選んで本当に良かったと思っている。それは、もちろん新潟大学歯学部の熱意ある講義や、恵まれた実習環境に因るところも大きいがそれだけではない。多くの友人や先輩、後輩、先生方との出会い、そして何より、この大学で悩み、もがきながら前に進み続けてきたという自負が、5年前の自分とは比べ物にならないほど、私という人間の軸を確かなものにし、人間として成長している実感を与えてくれている。

もちろん、歯科医療従事者としてはまだスタートラインにも立てていないが、臨床を経験させていただいている恵まれた私たちは、敢えてより先を見据えるべきではないだろうか。

国家試験を乗り越えた先に待つであろう試練に屈することなく、いずれ歯科医療界をリードしていこうという気概を胸に、私は明日も緑衣に袖を通す。



歯学部生の今

歯学科6年 鈴木 兼一郎



歯学部歯学科6年の鈴木兼一郎です。6年連続6回目の歯学部ニュースへの原稿掲載になります。そんな私は早くも6年生になってしまいました。新潟大学歯学部に入学したことが昨日のように思い

出されます。1年生の時からこの歯学部ニュースに自分の成長過程を載せていただいておりますが、遂に最後の掲載ということになってしまい、時間の経過の早さを感じると共に、自分の文章構成力の向上を感じております。前置きはさておき、例年に引き続き6年生になってからの学生生活を振り返ってみようと思います。

2015年4月をもって、新潟に初上陸したときは想像もしていなかった6年生になり、国家試験をあと半年後に控え、現在は臨床実習と共に国家試験対策勉強に励んでおります。5年の10月から始まった臨床実習では実際に患者さんに対し、歯科治療を行っています。もちろん先生の監視の下、診療を行っています。他の大学では味わえない貴重な体験をさせていただけるということに日々感謝しながら、一つの一つの経験を無駄にしないよう、日々実習に取り組んでいます。来年の4月から歯科医師となりますが（※国家試験に合格すれば）、この経験を単なる学生実習の一部として終わらせるのではなく、1人前の歯科医師になるための最初のトレーニングとして、残りの実習でもさまざまなことを学んでいきたいと思っております。また、このような貴重な経験ができるのは臨床実習に携わっていただいている多くの先生方と病院の職員の方たちのおかげだということを忘れないようにしたいです。

学業以外の面についてですが、特に問題なく生活できています。むしろ快適です。新潟に来て1年目はあの冬の寒さにやられ、なんて住みにくい県なんだと思いましたが、今となってはその寒さ

にも慣れ、新潟は住みやすいのではないかとこの錯覚に陥っています。気のせいかもしれませんが、最近の新潟は晴れている日が多いと思うようになりました。新潟に来て1年目は1週間の内、6日は雨でしたが、今はほぼ毎日晴れているような気がします。でも多分、気がするだけです。完全にマインドコントロールされてしまいました。自分の趣味はジョギングなのですが、晴れている日にはたいていやすらぎ堤をジョギングしています。なので、最近晴れていてとても嬉しいです。臨床実習が終わってから国家試験勉強に専念することになると思いますが、息抜きにちょうどよい環境があつてよかったなと思っています。これからの進路についてはまだ悩んでいますが、新潟に残ることについても前向きに検討したいと思っております。

最後になりますが、昨年のある出来事について報告します。昨年12月のことです。自分は、毎年雪が降る福島県出身でありながら、雪道で滑って左側上腕骨を骨折し、左腕が全く動かなくなりました。人生初の骨折であり、23年も雪道の上を歩いてきたにも関わらず、初めて転ぶという…。この時いくら雪道に慣れていようと、油断していた自分が愚かだったなと感じました。何が言いたいかというと、これからの人生でいろいろなことがあると思っておりますが、何時如何なる時も驕ってはいけないうことです。働けば、日々の仕事に慣れてくる時が必ずくると思いますが、そんな時こそ更に気を引き締めて、患者さんに対して治療を行っていくようにしたいです。それこそが1人前の歯科医師になるために大切な心得だと思っております。そして、骨折した時に臨床実習を手伝ってくれた友達や、実習をそのまま継続させてくれた先生方には大変感謝しております。ありがとうございました。これからいろんな壁にぶつかると思いますが、その一つ一つの壁を丁寧に壊して、前進していこうと思っております。歯学部ニュース愛読者のみなさん、6年間自分の文章構成力の成長を温かく見守っていただいていたありがとうございました。

歯学生の今

口腔生命福祉学科 2年 崔 伽 耶

新潟大学歯学部口腔生命福祉学科に入学してはや1年。私達は五十嵐キャンパスでの1年間の教養科目履修を終え、旭町キャンパスでの専門科目の勉強を始めた。今はまだ専門科目と言っても座学やPBLが基本であるが、これらが歯学の基礎知識・医療人に必要なスキルの大切な一歩目だとみな自覚し勉学に励んでいる。

歯学部棟は旧新潟大学歯学部所属病院であり現在の新潟大学医歯学総合病院と隣接していて、大学というより医療現場という雰囲気が強く感じられる。また歯学部の先輩方や白衣の先生方と会う度に、自分の近い将来そして少し遠い未来を考えずにはいられない。

そのため眠い目をこすりながらバスに乗って通学している時でも窓の外に「新潟大学病院」の文字が見えると自然と気が引き締まる気がする。

先ほども述べたとおり私達の今の授業の基本は座学とPBLである。しかし早期臨床実習ⅡBでは実際にいくつかの施設の見学を行った。実際に施設の様子を知り、そこで働く職員の方と話すことで今までは知識としてしか知らなかった医療・福祉の仕事ややりがい、難しさを自らの目と耳で感じる事ができた。

また私は歯科衛生士概論という授業も印象的である。この授業では実際に様々な現場で働いていらっしゃる歯科衛生士・社会福祉士の先生方の話を聞く事ができた。中には新潟大学の口腔生命福祉学科の卒業生の方もいらっしゃり、とても身近に感じられた。診療所の歯科衛生士、行政の歯科衛生士、特別養護老人ホームの社会福祉士、行政の社会福祉士などはそれぞれ仕事も役割も違い同じ資格でもとても幅広く可能性豊かな職だと感じた。

これらの授業で私は自分の将来についてとてもよく考えさせられる。高校時代、自分の将来を悩み考え、確固たる意志をもって歯学の道を志し口

腔生命福祉学科に入学したというのに、私はまた将来について悩んでいる。それはやはり歯科・福祉の世界の幅広さ・奥深さのためであろうか？

就職について調べたり、就職時の試験に向けて勉強を開始したり、また福祉のボランティアや海外派遣に参加するのも今だろう。

しかしそうはわかっている私達はどうしても目先の事柄にとらわれやすい。目の前の試験やレポート、部活やサークル、遊び…。もちろんこれらも決しておろそかにしてはならない。目の前の課題をしっかりとこなし、大学生の間しかできない楽しいことを目一杯経験することも自分の財産となるだろう。

しかし私達は大学2年生である。大学2年生は多くの学生が19歳から20歳になる年である。未成年から成人へ。ただの20回目の誕生日、そう思うこともあるかもしれない。確かに20歳になったからといって急激に成長したりはしない。けれど自分の節目を迎え、未来を見据えていくきっかけにするには十分である。

私達は将来医療人になる。専門知識と技術をもって多くの人を支えていく仕事に就く。どの分野でもそうであろうが、医療・福祉の道も易しくないだろう。正直、私の心と頭の中は不安でいっぱいである。後3年もしたら卒業し、就職しているというのに、今の私達はあまりに何も知らない。予防処置の方法も、保健指導の仕方、歯科の治療器具の使い方、終末期の患者の接し方も、QOL維持向上についても…。

これから学んでいくしかない。今知らないのだから。将来に向けてまた一歩踏み出す時だ。今すべきこと、今しかできないこと、今したいこと、それらを考え実行していかなければならない。自分の人生をより豊かなものにするために。そして医療人としての矜持を抱きながら微力ながらもこれからの社会に貢献していけるように。

歯学生の今

口腔生命福祉学科3年 坂井 遥

私が口腔生命福祉学科に入学して2年が経ちました。大学生活ももう折り返し地点を過ぎてしまい、将来のことを考えていかなければならない時期となりました。

3年生になって変わったことといえば、本格的に社会福祉士の勉強が始まったことです。2年次は歯科の勉強が主だったので、新しい分野を学び始めることにとてもワクワクしていました。前期の授業の早期援助技術演習では、特別養護老人ホームや障害者交流センター、障害者リハビリテーションセンター、児童相談所など、実際に社会福祉士が活躍する場を見学しに行きました。今までは社会福祉士の仕事について具体的なイメージがつかめませんでした。講義だけでは分からない、実際の現場の雰囲気や様子を感じることができ、これから社会福祉を学ぶ意欲が高まり、将来の視野を広げることができ、とても自分の身になる見学となりました。

また歯科の方の授業では、幼稚園に歯科保健指導に行ったことが一番印象に残っています。幼稚園で劇を通して園児たちに歯磨きや仕上げ磨きの大切さなどを伝えてきました。歯磨きの嫌いなもえちゃんのお口の中で悪さをするバイキン軍団を、歯磨きレンジャーがやっつけるというシナリオで、私はバイキン軍団を演じました。大道具や衣装をみんなで作り、先生方にもアドバイスをいただいてシナリオを何度も書き直しながら、放課後や昼休みにリハーサルを行ったのは大変でしたが、とても有意義な時間でした。当日、園児や保護者のみなさん、先生方の前で役を演じるのはとても緊張しましたが、楽しみながら歯科保健指導を行うことができたと思います。しかし、実際には人に自分の言葉で説明したり指導することはやはり難しく、戸惑うことも多くてまだまだ自分の力が足りないなと感じました。今回の経験を、こ

れからの保健センターなどの実習でも生かしていきたいと思います。

一方、歯科の実習では病院に出ることも増えてきました。主に病院の歯科衛生士さんにつかせていただき、その治療や保健指導の内容などを見学させていただいています。時にはバキュームや歯周チャートの記録など簡単な補助もさせていただくことがあり、実際に患者さんと接するのは初めてだったので緊張しましたが、とてもよい勉強になりました。今、相互実習では超音波スケーラーを用いたPMTTC、浸潤麻酔下で手用スケーラーを用いたSRPなどと様々な実習を行っています。そのような授業で学んだことを、実際の臨床の場で見学させていただき、自分のものにしていくことが出来たらと思います。

大学に入ってから2年以上がたち、みんなで試験を乗り越えて、実習にも取り組んで、どんどん3年生のみんなの結束力は強くなってきていると思いますし、本当にみんなの仲が良いなと感じています。これからは勉強でも実習でも、今までより忙しくなるし、大変なこともたくさんあると思いますが、これまでの経験を生かしながらみんなと一緒に頑張っていけたらと思います。



歯学生の今

口腔生命福祉学科4年 牧野 未来

3年生の春休みが終わろうとしている時、衝撃的な情報を目にしました。その情報とは、「4年生のガイダンスは4月1日から3日間、しかも1～5限までずっとガイダンスがある。」というものです。とりあえず目を疑い、あれ、ガイダンスって1日で終わるものじゃなかったかな?と思いました。でもふと気付きました。これから私達は口腔の学生が最も忙しくなる4年生になるのだったということ。大学に入学してから学科の先輩方や先生方から、「この学科は学年が上がるごとに忙しさを増すよ。」ということをよくお聞きしていましたが、それはやはり本当らしいということを確認し、ガイダンスに臨みました。ガイダンスでは、4年生の大学生活の大半を占める病院実習のことや特論のこと、約1ヵ月間外部で実習を行う福祉現場実習のことについて、今後どのようにそれらが進んでいくのかを把握しました。ガイダンスを受けて率直に感じたことは、「これからやっていけるかな。」ということ（笑）。そんなこんなで始まった4年生としての生活をこれからご紹介します。

私達は現在、週に4日病院の様々な診療科にて実習をさせていただいています。実習中は診療のアシストをさせていただいたり、オペや特殊な治療の見学をさせていただきます。診療科によって



実習期間が変わってくるのですが、1つの診療科につき1週間以上実習を行います。実習先が変わる時には学生間で引き継ぎを行い、診療科が移ってもスムーズに実習をできるようにしています。引き継ぎに際しては引き継ぎノートというものを作り、学生同士の情報共有を図っています。1日の実習を終えると実習日誌を書きます。今年はこの日誌についての過渡期で、診療科によって日誌を紙で出すかポートフォリオで出すか違ってきます。ポートフォリオというものが今年度から口腔の実習に新しく導入されたシステムで、日誌をパソコンで作成します。最初の頃はシステムがうまく作動せず、なかなか混乱した時もありましたが、今ではポートフォリオを不自由なく作成できるようになりました。また、1日の実習を終えて疲労感MAXの中で日誌を書くことにもだんだんと慣れてきました。昨年度までは、「明日1、2限ない!」という日が普通にあったように感じたのですが、今ではそんな日があったのなら奇跡的なことだと思うようになりました。むしろ、毎週金曜日にある講義（1日）を、嬉しいとさえ思えるようになりました。人間の慣れてすごいなと身を持って実感しています…。福祉現場実習はもう既に実習を終えた学生、現在実習中の学生、これから実習へ行く学生それぞれなのですが、こちらも病院実習に負けず劣らず結構ハードです。実習前に施設の事前訪問へ行くことや計画書を作成すること、実習中に毎日日誌を書くこと、実習後は総括レポートを作成することなど、やるべきことが多くあります。そして、施設によっては夜勤をすることもあるようで、実際の職員の方と同じように実習中は過ごす感じになります。外部で実習を長く行うことは今までにあまりしてこなかったことなので、貴重な経験を今回の実習で積むことができると思います。実習の他に、4年生

ならではのものといえ特論が挙げられます。学生1人1人が自分の興味があることでテーマを設定し、先生の指導を仰ぎながら論文を完成させていきます。10月末が最終提出にあたるので、それまでに何とか仕上げていきたいと思います。

最後になりますが、4年生はそろそろ進路を具体的に決めて就活をしていく時期に入っています。どの道に進むにせよ、学科全員が自分の思い

思いの場所で、新たなスタートを来年の4月から切れているといいなと思います。卒業前には2つの国試もありますが、全力でぶつかっていき、全員合格を達成したいです。皆が笑顔で卒業できるよう、今後の学生生活においても、辛いことは皆で乗り越えて、楽しい思い出をたくさん作っていきたいと思います。

